

ICEM '97†

牧野正彦††

本会議は、放射性廃棄物の処理・処分及び環境修復に関する技術を広く紹介、議論する国際会議であり、米国機械学会が1年おきに世界各地で開催しているものである。第1回は香港(1987年)、第2回は京都(1989年)、第3回はソウル(1991年)、第4回はプラハ(1993年)、第5回はベルリン(1995年)と続き、この度の第6回が10月12日から16日までの間、シンガポールにて開催された(1997年)。次回の第7回は名古屋(1999年)で開催されることになっており、筆者と日立製作所の菊池氏が名古屋開催の準備委員としてこのシンガポール会議に臨み、菊池氏より名古屋開催の紹介を行った。筆者と菊池氏は名古屋開催向けの交渉を米国機械学会の代表者と交渉するという立場もあり、この会議の特色を理解出来る立場であった。

今回のシンガポールでの開催は米国機械学会と中国原子力学会との共催であり、開催地は当初北京の予定であったが、台湾からの参加問題で、米国側、中国側の意見調整で合意に至らなかったという経緯があり、前年夏頃に急きょ開催地がシンガポールに変更された。この急な変更に伴う混乱もあり、テクニカルツアーはなしということになり、また参加者は250名位と過去のこの会議の実績からすると半分以下となってしまった。特に中国からの論文発表予定25件が3件になり、インドネシアの山火事の煙による健康障害を心配して欧米からの出席取りやめも多く、米国DOEの国際会議参加向け予算削減の政治的な影響あり、従来の会議への米国からの参加者の減少も目についた。

このICEM97会議のスコープは、

- ・国の環境管理プログラム
- ・住民参加、経済性、規制、等の総合的視点
- ・使用済み核燃料、HLWの貯蔵、輸送、コンディショニング
- ・処分向けのHLWの処理、廃棄体基準
- ・深地層処分での廃棄体性能と核種移行
- ・使用済み核燃料、HLWの廃棄体特性、安全解析、施設設計
- ・低中レベル廃棄物の廃棄体特性

- ・低中レベル廃棄物の処理
- ・低レベル廃棄物の処分、浅地中埋設核種移行
- ・汚染サイトの特性、修復
- ・除染、解体の技術と経験
- ・一般利用されている密封線源の管理

であったが、Advance Program段階で47あったセッション数が、Final Program段階にて44に減少し、さらにシンガポールでの会場にて発表キャンセルの多さに鑑み、3日目からのセッション22~44を新セッション1~16への組み替えが急きょ行われた(セッション数が更に7減)。

このような事態が発生したにも拘らず会議運営がスムーズに行われたと感ずることが出来たのは、米国機械学会からの本会議運営責任者のS.C.Slate氏と事務局サポートを託されていた、Laser Option Inc.のスタッフのてきぱきとした事務処理能力のおかげであったとの感想を持ち、日本もある意味では国際会議のマネージメント(危機管理)で見習う点であろうと関心させられた。

放射性廃棄物関係の国際会議で、"MIGRATION"のようにプロフェッショナルな技術に特化したものの分かり易さは別として、ここのところ放射性廃棄物管理全般に関する国際会議の数が多くなり、各々の国際会議の特色が何なんだという疑問の声も出始めている。そこでこの場を借りて、歴史的に各種の放射性廃棄物関係の国際会議の仕組み作りに関わって来られた東大鈴木(篤)先生の見解を以下に紹介させて頂く。

この"ICEM"はスタート時には、発電所のRW処理を中心に取り上げ、電力会社の関係者(例えばカナダのオンタリオハイドロのR.Kohout氏)が中心となり運営を行っていたが、第3回の会議(ソウル)から当時問題になり始めた環境修復問題も取り上げることになり、会議のタイトルにもそれが追加されるようになり、さらに廃棄物処分も取り上げられるようになって来ている。"SPECTRUM"は廃棄物処理についての米国内の国立研究所における廃棄物処理研究開発の意見交換の場としてスタートしたものである。"WASTE MANAGEMENT"は政策論、法、制度、技術等の幅広い分野を議論の対象として今日に至っている。"MRS"はRW処分に伴う材料面での議論を当初の意図としてあったが、材料問題に拘らず科学的な側面も積極的に取り上げることにして来た。"ラスベガス会議"はHLW処分を対象として、全般的な議論を行う会議である。

† ICEM '97: 6th International Conference on Radioactive Waste Management and Environmental Remediation, by Masahiko Makino
 †† 日揮株式会社 第2事業本部 第4プロジェクト事業部
 プロジェクトマネジメント部 Project Management Department,
 Project Operations No.4, No.2 Project Division, JGC Corporation
 〒220-6001 横浜市西区みなとみらい 2-3-1

この度のこのICEM97では、急速に勢いを増して来ているアジア地域での原子力活動を米国機械学会が強く意識、意図したものであり、政治的な米中関係のやり取りの中で、北京での開催には失敗したが、今後もこのICEMがアジアを強く意識するという方向性が打ち出されて来ることは間違いなからう。この視点は東大の小佐古先生が意欲的に取り組まれている、原子力利用の振れ幅の大きいアジア、オセアニアの原子力利用に伴う廃棄物問題にも光を当てるといふことにもなり、例えば鉱業活動（ウラン採鉱、処理、等）に伴う廃棄物問題にも米国機械学会は取り組もうとしているように見える。

日本では、“TRU廃棄物”の用語を全面に出して活動しようとしているが、欧米においては、“中レベル廃棄物”という用語で定着させようとの意識があるように感じられ、今後日本が国際的な場で、“TRU廃棄物”を主張すべきかどうかで、継続して強調すべきか、または引っ込めるのかというポイントを個人的な感想として持った。

筆者は、名古屋で開催されることになるICEM99の組織委員会の一員として、この度のシンガポールでのICEM97での経験を踏まえて、欧米、アジア、オセアニア、ロシア、東欧、等での原子力利用の中で、何らかの形で日本が原子力利用に関わる国際調和問題につききちんとしたスタンスを取り、国際社会の中で存在感をマネージできるようになることを心から願い、原子力分野の勢いを改めて盛り返したいと希望するものであり、国内関係者の力強い協力をこの場をお借りしてお願いしたい。